

聖書翻訳における省略の取り扱い —新共同訳とリビングバイブルの比較—ⁱ

饒平名 尚子

1. 初めに

翻訳とは何か、どういう翻訳がいわゆる「成功した」翻訳であり、どういう翻訳が「悪い」翻訳なのか、これまでさまざまな議論がなされてきた。その中には、翻訳は「技術」であり訓練するものである、といったレベルのものから、翻訳の包括的な理論の確立を目指したものまであり、コミュニケーションのグローバル化が進む中、議論は更に活発に進んでいる。また、言語学やコミュニケーション研究、認知心理学等の分野の発達に連動して、人間の言語コミュニケーション行動の一部としてみた翻訳に新しい視点が出てきている。新しい波は、聖書翻訳の分野にもさまざまな影響を及ぼし始めている。日本語訳の聖書にもさまざまな試みがなされ、いくつかの現代語訳が存在する。本研究はその中から、新共同訳と日本語版リビングバイブルを取り上げ、「省略」という現象に焦点を当てて比較分析していきたい。二つの異なる編集理念、文章スタイルを持つ聖書訳において、情報の省略または補足がどのような形で用いられ、そこにどんな特徴が見られ、読者にどんな影響を与えうるかを考えていきたい。

これまで言語学の観点から日本語聖書の翻訳を比較分析したものは少なく、しかも新改訳と新共同訳、口語訳との比較がほとんどであった。この背景としてリビングバイブルは、神学上の理由によりあまり重要視されてこなかったのではないかと考えられる。つまり、リビングバイブルは意識が多く、訳者の解釈が表面化している部分が多いと言われており、聖典として教会で用いられることにためらいがある。従って分析の対象として重要視されてこなかった、と

思われる。しかしながら、「コミュニケーション」という観点で聖書翻訳を見る
とき、リビングバイブルは非常に興味深いデータを提供してくれる。数多くの
意識と情報の補足がなされ、文体的にも会話の台詞や感情表現などに臨場感を
だす工夫がなされ、情報の受け手である読者の理解をより一層助けようとして
いるからである。また、日本語版リビングバイブルのもととなった英語版リビ
ングバイブルの方は、アメリカでは日本よりは受け入れられていると思われる。

新改訳と新共同訳では、高橋 (1999) および松本 (2001) の研究によれば、
新共同訳の方が、人称詞の使用頻度が低いことが指摘されている。つまり、新
共同訳の方が人称詞を省略している場合が多いということである。そこで、コ
ンテキストの情報をテキストそのものにかなり補う傾向があるとされるリビン
グバイブルと、新共同訳聖書を比較して、その特徴を言語学的に検討してい
きたい。さらに聖書にあまりなじみのない読者によるテキスト理解度に関するア
ンケート調査も取り入れながら、聖書翻訳をディスコース分析、コミュニケー
ションの視点から探っていきたい。

2. 聖書翻訳に関するこれまでのアプローチ

2. 1 言語コードモデル

翻訳する際にしばしば問題になるのは、元となるテキスト (source text: ST)
と翻訳されたテキスト (translation text: TT) が同じ (equivalent) であるか
どうか、である。しかしながら「同じ」というのは一体何であるかによっては、
STとTTが同じであるとみなされるか否か、判断が曖昧な概念である。二つの
テキストが同じである、というとき、それは単語一つ一つの意味が同じである
のか、それとも (メタファーや言葉遊びのような部分は特に)、情報の受け手側
の言語に合わせて、だいたい同じような効果をもたらせれば良いのか、大体同
じとは判断基準をどこに定めるのか、突き詰めて考えていけば議論は尽きない。

また、「同じ」という基準で翻訳の良し悪しが評価されるならば、オリジナル
と同じであればあるほど良い翻訳である、という判断が下されることになる
が、「同じ」の判断が曖昧である以上、果たして本当にそれで良いのであろう

か? Hönig and Kußmaul(1984), Gutt(2000)等は, このような「同じ」であるという基準によって翻訳を評価することは問題があると指摘している。Equivalenceは翻訳が直面する課題のほんの一つにすぎないからである。

この問題自体は, 何も新しいことではなく, すでに多くの翻訳者により問題視され, さまざまな検討がなされてきた。例えば, Nida(1964), Nida and Taber(1969)は, 聖書翻訳においてDynamic Equivalenceという考え方を示した。これはオリジナルにできるだけ忠実になりながらも, 情報の受け手の言語にオリジナルの言語と同じ言語構造が存在しないときには, 受け手の言語に合う形で, 「ダイナミック」に意識をする, という原則である。聖書を読み手に少しでも理解しやすい自然な翻訳をするための, ぎりぎりの妥協案といったところであろうか。ここでいう「ダイナミック」とは, 思い切った大幅な意識のことではない。あくまでも, オリジナルテキストの言語構造と, 情報を受け取る側の言語の構造が一致しない場合に限って, という条件付である。

省略に注目するならば, Nida and Taber(1969: 168)は, 次のような7つの条件下においては, たとえオリジナルのテキストには書かれていても, 翻訳の過程で削除することが可能としている。

- 1) simplification of doublets
- 2) reduction of repetitions
- 3) omission of specification of participants
- 4) loss of conjunctions, when subordinate constructions are replaced by coordinating ones
- 5) reduction of formulas
- 6) differing paradigms of ellipsis
- 7) simplification of highly repetitious style

これに対し, Gross(1996)は, このような基準の必要性を認めながらも, どの程度までが, 正当性があると評価される省略であるのか, 判断基準が難しいことを指摘している。

Gutt(2000) は、これまでの聖書翻訳は、コミュニケーションにおいて言語の果たす役割を中心に据えて、言語情報の送信と受信によってコミュニケーションが成り立つ、と仮定した「言語コードベース」のアプローチである、とした。そして、言語コードベースのアプローチの限界を指摘する。時間的にも文化的にも地理的にも、聖書が書かれた時とはかけ離れた世界に住む読者は、書き手の意図を理解するうえで必要なコンテキストを持ち合わせていない。にもかかわらず、オリジナルの言語コード対受け手側の言語コードの組み合わせにのみ目を絞る、読み手が持ち込むコンテキストと書き手のコンテキストのミスマッチを無視した形でこれまでの聖書翻訳がすすめられてきた、というのだ。Guttの主張の根拠となるのは、Sperber & Wilsonによる関連性理論の枠組みである。これは、人間の情報認知プロセス、推論プロセスに注目してコミュニケーションを捉えようとするアプローチ（推論モデル）であり、Gutt(2000)は、翻訳理論は関連性理論に全て集約できると主張した。

2. 2 関連性理論と翻訳理論

関連性理論 (Relevance Theory) は、1986年にSperber & Wilsonによって発表された。人間の認知力に注目し、人がコミュニケーションする場合、相手の言おうとすることを聞き手はどう認知するか、そのプロセスに関わる理論を包括的に展開しようとした。

関連性理論では、言語で表現された発話には、その単語の意味の他に、話者の真の意図があり、単語の意味から話者の意図へ聞き手が解釈をするプロセスがコミュニケーション上必要になる、と想定する。単語一つ一つの意味がわかって、それだけで話者の真の意図が理解できるとは限らない。そこで、単語の意味による表現から真の意図へ解釈を導くプロセス上どうしても必要になるのが、コンテキスト(context)である。コンテキストとは言語学上の文脈ではなく、cognitive environmentのことを関連性理論では指す。Cognitive environmentとは、物理的な環境、記憶（直前の発話、歴史や文化的知識など）、これら二つから推測できる情報を含む、巨大な様々な情報を指す。つまり、コミュニケーションはcontextに依存して成り立っており、このコンテキストと

は単に言語の文脈にとどまらず、受け手が意味解釈のために用いるあらゆる情報や状況に対する推論を包括した、心理学的概念である。

さて、この巨大な情報網と推論のプロセスの中から、与えられた発言に対する適切な意味解釈にたどり着くために必要となるのが、optimalization（最適性）という考え方である。意味解釈上必要なプロセスのコストを考えたとき、もっとも労力が少なくてすむ解釈をコミュニケーション上人間は採用する傾向がある、というのだ。だから理解するのに努力が少なくてすむ形で、話し手は言語情報を提供しようとする。受け手は与えられた言語情報に基づき、それまで自分が持っていたコンテキスト上の仮定を修正したり確信したりする。このようなcontextが受ける影響のことをcontextual effectと呼んでいる。

コミュニケーションにおいて、話し手の真の意図を理解する上で、最適な、関連性のある情報を受け手は選択して認知し、それに基づいて今まで自分が持っていた情報や推論をさらに修正したりしながら、できるだけ労力がかからない経路で意味解釈へたどり着くのが原則である、と関連性の理論では考える。ここで言う「関連性」は、contextual effectと意味解釈プロセスにかかる労力の相互作用で決まる。Optimal relevance（最適関連性）がコミュニケーション上意味解釈に決定的な要素なのである。

これを翻訳理論に応用しようとしたのが、Guttである。Gutt自身、ウィクリフ聖書翻訳者協会に所属し、聖書をエチオピアの言語に翻訳する作業に携わった。Guttはこれまでの聖書翻訳を言語コードベースの翻訳として批判した。オリジナルテキストが読み手に期待していたコンテキストの情報（contextual information）と、現代の読み手が意味解釈に導入するコンテキストの情報（contextual information）および解釈に必要な労力のミスマッチを無視した翻訳を批判し、思い切った改革を呼びかける。聖書のオリジナルの記載を、言語上忠実に訳したものが、ある民族にとって文化的、社会的、歴史的なさまざまな理由により、その意図が全く誤解されて解釈されてしまう場合もある。最適性と関連性の原理に基づいたとき、避けられない解釈上のミスマッチをどうするか？これまでの言語コードベースのアプローチでは対処が不適切であったと鋭い批判をした。

当然ながら、聖書翻訳に関わる人々からは、このような批判に対して非難の声もあがっている。神のことばとしての権威をどうするのか？ 翻訳されたテキストを提示する上で、受け手の持ち込むコンテクストにあまりに敏感になることで、かえってマイナスになる面があるのではないのか？ 聖書のテキスト本文に表されない時代的文化的情報は、脚注や注解書の形で補えば良いのではないのか？ しかし、注解書や脚注があったとしても、それで本当に充分なのか？ 書き手と読み手の間にある、コンテクスト情報の mismatch は解消されるのか？ また、現代の聖書翻訳は、まだ翻訳がなされていない少数民族の言語、注解書の完成を待てない言語、民族に広まっている。その場合、どう訳出するのか、テキストにどこまで情報を修正して加えるのか？

これらの問題は、本稿の中心的関心である、テキストにおける情報の省略ということとも関わっている。

2. 3. 日本語における聖書翻訳の言語学的比較研究

ここで、日本語における聖書翻訳について目を向けていきたい。省略と訳出および情報の補いは、日本語への聖書翻訳でも重要な課題の一つである。日本語は省略が比較的多いと言われている言語であるが、どれだけの省略（例えば主語や目的語をいちいちテキストに挿入するかどうか）が自然でくどさがないものと読者には受け止められるか、ということを考える必要がある。

日本語聖書の人称詞の省略と訳出という点では、高橋（1999）と松本（2001）が参考になる。

高橋（1999）は、旧約聖書の詩篇 1 から 41 篇において、神及び人に言及する言葉のうち、一人称、二人称、三人称が何度使われているかを調べ、新共同訳、新改訳、Today's English Version の 3 つにおいて較べた。結果は、TEV が一番人称詞の使用頻度が高く、二番目が新改訳、三番目が新共同訳であった。

	一人称	二人称	三人称	合計
新改訳	152	83	272	507
新共同訳	100	54	215	369
TEV	186	112	320	618

松本（2001）は、創世記とマタイによる福音書における二人称の使用頻度について、新共同訳と新改訳を調べた。結果は高橋と同じ傾向があり、新共同訳の方が新改訳よりも人を表す二人称の言葉の使用が少なかった。松本はその理由として、新共同訳のほうがより自然な日本語に近づけようとする基本方針があり、くどさが少なくなっているのではないかと述べている。（松本2001：93）。

新改訳聖書は、人称表現の使用頻度が高く、くどさがかんじられる箇所がある。意味的区別に関しては感情・態度を重視し、のろいと祝福の対比などを二人称代名詞の選択に反映させている。その一方、日本語にとって重要な上下関係を反映させていない場合がある。それに対し、新共同訳聖書は人称表現をできるだけ少なくして、自然な日本語にすることに成功しているケースがある。また、親族名詞の使用など、上下関係に注目して二人称表現を選択するなどの点において新たな工夫がみられる。

ただし、松本は文末の動詞語形に関して、新共同訳の会話文には話し言葉として不自然な箇所が多く、新改訳、新共同訳共に、日本語として自然な訳を目指す立場からは改善の余地がかなり残されている、と指摘している。

人称詞の訳出一つとっても、非常に複雑な問題をはらんでいる。日本語のように社会的上下関係が自分や相手をさす表現にさまざまな影響を及ぼす言語では、オリジナルのテキストで区別されていない表現も、別々に訳を当てる必要が出てくる。さらに、言語構造上の制約や文化的な理由により、主語の省略が起こりうるかどうか、省略の使用が自然であるかどうか、「自然な訳」を求めらる中で常に吟味されなくてはならない。

それでは次に、実際に新共同訳とリビングバイブルを比較検討していきたい。

3. 新共同訳聖書と日本語版リビングバイブル

3. 1 新共同訳聖書とリビングバイブルの刊行背景

新共同訳聖書は1987年に完成した。1960年代以降プロテスタントとカトリッ

クのエキュメニカル運動が広がる中で、日本のプロテスタントとカトリック教会が共同で翻訳作業を進める動きが始まり、その結果1975年にまずルカによる福音書、1978年には新約聖書の翻訳が完了した。これが「共同訳」である。その後旧約の諸書が刊行されたが、それらに寄せられた反響を反映しつつ、大幅な改定をして出版されたのが「新共同訳」である。共同とは、プロテスタントとカトリックの共同事業という意味で使われている。

日本語のリビングバイブルは、英語版のリビングバイブルを日本人にあうように一部修正を加えた翻訳であり、1978年に刊行された。キリスト教の専門用語をできるだけ使わず、注をみずとも、読むだけで初めての読者でも理解できるように、説明的な語句が補われている。現代日本語を使った平易な訳といわれている。

3. 2 二つの翻訳の特徴

新共同訳とリビングバイブルを較べてみると、それぞれに挿入されている情報と省かれている情報とに異なった特徴がみられる。いくつかの項目に分けて、ヨハネによる福音書11章：1-27節の部分を比較してきたい。

3. 2. 1. 分析するテキストについて

このヨハネによる福音書11章1-27節の箇所は、イエスと親しかったマルタとマリアの兄弟、ラザロが病気にかかり、イエスにそのことが伝えられるが、イエスがすぐにはラザロのところへこない為に、ついにラザロが死んでしまう、という内容である。その後28節以下（本研究の分析外であるが）ではイエスがラザロをよみがえらせる奇跡を行なう記事が続く。この箇所を選んだ理由は以下の通りである。

1. 愛する兄弟の死という感傷的な出来事が中心となる箇所である。それゆえ、感情表現や状況の盛り上げなどに、二つの訳で表現の違いが多く見られることが期待できる。
2. ある程度まとまったストーリー性がある。
3. イエスとイエスを取りまく人々が程よいバランスで登場する。

4. 聖書のほかの箇所（山上の説教や、十字架上での処刑の場面など）にくらべるとあまり有名ではない箇所なので、後にアンケート調査をする際に、以前にこの箇所を読んだことがある人（従ってコンテキスト情報を沢山もっている人）が少ないと考えられる。

以下に新共同訳とリビングバイブルのテキストを並べて示し、特徴的な部分を取り上げていく。情報の提示と省略に関して、二つのテキストがどのように同じ場面を取り扱っているかを調べることで、これらの現象が聖書翻訳においてなす機能をみていきたい。なお、本研究で取り上げた箇所のテキスト全体は、付録におさめてあるので、参照されたい。また、本稿の表には、スペースの関係上、新共同訳、リビングバイブル両方に共通して現れていたものは省き、両者で訳出の仕方が異なるもの、一方にしか現れないものを載せた。

3. 3 聞きなれない特殊用語の置き換え

聞き慣れない特殊用語は、リビングバイブルでは別の日本語に置き換えられているが、新共同訳では、そのまま原語の音を真似てカタカナで表記している。

用語の置き換え

節	新共同訳	リビングバイブル
8	ラビ	先生
16	ディディモ	ふたご
18	15スタディオ	3キロ

これらの聞き慣れない特殊用語は、オリジナルのテキストが書かれた当時においては、書き手と読み手が共有していた言語情報である。18節を例にとって考えてみよう。「ベタニアはエルサレムに近く、15スタディオほどのところにあった」と新共同訳には記載されている。15スタディオがどのくらいの距離であるかは当時の読者たちには容易に理解できたのであろう。大都市エルサレムに近いベタニアで死んだラザロのところへは、弔問客が大勢やってきた。

そしてその大勢の人々の前で、イエスの奇跡は起こる。結果として多くの者が奇跡の目撃者となった。更にこのことは、後にイエスをメシアと信じる者たちが増えることに対する律法学者たちの恐れと怒りという事柄へと続いていく。15スタディオンという距離は、そのようなイエスの奇跡の段取り上、意味を持つ距離である。しかしながら、現代の読み手は、時間的にも、地理的にも、文化的にもオリジナルテキストが書かれた時とはかけ離れた世界で生きている。スタディオンが距離の単位であることさえも容易には理解しがたい読者がいるかもしれない。

このような場合、これまでの翻訳では主に二つの方法がとられてきた。一つ目は巻末の付録、脚注や注解書の形で、欠如したcontextual information、つまり意味解釈上必要な文脈の情報を補う、という方法である。そしてもう一つの方法が、機能的に同じ意味を持つ別の用語に訳しかえる、というやりかたである。新共同訳では、前者の方法を取り、巻末に付録として聖書地図、用語解説、度量衡及び通貨の一覧などが載せてある。スタディオンも付録の中で、「新約・長さ、約185m、ミリオンの1/8」と記されている。一方、リビングバイブルは、ここでは後者の方法を取って、「3キロメートル」と意識をしている。このあたりの方針について、リビングバイブルのあとがきには次のように記載されている。

度量衡の表記にあたっては、原則として日本での現行の単位を採用しました。数値は、ドルを円に換算したほかは、原則としてメートル法を採用している英語版のものに従いました。

ディデイモについては、新共同訳聖書の付録には、この語による見出しはない。聖書に不慣れな読者にとっては、これが何を意味するのか、簡単に知る糸口を見つけるのは難しい。新共同訳ではその基本方針として、「原文を完全に再現するために、忠実であり、正確であること、固有名詞表記も、原文の発音に近いものにする」と(新共同訳聖書序文)があげられており、この箇所でも原文の発音に近い形でカタカナ表記がなされている。

3. 4 人を表す言葉や人称代名詞の使用と省略

新共同訳とリビングバイブルを比較してみてもう一つ特徴的なのは、人に言及している言葉や人称代名詞が訳出されているか、省略されているかという点である。新共同訳では、リビングバイブルよりも、行動の主体が誰であるか、人称代名詞をより多くテキストに残している。

人称代名詞・人を指す言葉 (personal pronouns and person designating terms)

節	新共同訳	リビングバイブル
3		ラザロ
4		神の子の私
5	マルタとその姉妹とラザロ	マルタたち 3人
9	イエスは (お答えになった)	
10		イエスは (こう答えてから)
11	わたしたちの	
	わたしは	
15	あなたがたにとって	
21	私の兄弟	ラザロ
		あなた様が、あなた様さえ
23	あなたの兄弟	ラザロ
24	マルタは (言った)	
25	イエスは (言われた)	
27	マルタは (言った)	
	わたしは	

例えば、11節を見ていきたい。イエスが弟子たちにラザロのところへ行こう、と言うが、弟子たちは暗殺の危険を感じており、イエスの提案に反対をする。それに対してイエスは諭すように弟子たちに語りかけ、ラザロのところへ行く決意をもう一度述べる場面である。

ここで、新共同訳では、「わたしたち」(の友)、「わたし」が使われるが、リビングバイブルでは省略されている。

新共同訳

こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」

リビングバイブル

さらに続けました。「友達のラザロが眠っている。彼を起こしに行かなくちゃね。」

日本語における、代名詞省略の特徴として、主語が誰であるか文脈からはっきりと特定できる場合は、主語を省略することがしばしばあることが指摘されている (Hinds 1982)。例えば、彼を起こしに行くのが、発言者自身であることが文脈から聞き手に明白であるならば、日本語としては省略できる。反対にこのような場面で省略せずに主語を明示することは、別の意図があると解釈される場合もある。例えば、わざわざ主語を述べることによって、行動主体が誰であることを強調していると理解される場合である。11節における「わたしは」の使用はどうであろうか？文脈上、「わたしは」を入れなくても、意味は十分通じる箇所である。省略されたテキストの方が、くどさのないものとなっていると言えよう。フェリス女学院大学で行なわれた2003年度共同研究会でも指摘されたことであるが、「小説」として読むのであれば、ここではリビングバイブルの人称詞省略の方が自然に聞こえるであろう。しかし、問題はそう単純ではない。ここでは省略だけでなく、文体の問題もでてくるからである。新共同訳聖書と新改訳聖書における文末表現と日本語としての適切性については、松本 (2004) に詳しいが、リビングバイブルのイエスの発言で「起こしに行かなくちゃね」という、非常にくだけた言い方は、違和感を感じる読者もいる。ⁱⁱ

更に、24節から27節におけるイエスとマルタの会話のやりとりにおいては、発言者の名前と、「～と言った」という発言行為を描写する動詞が、新共同訳では繰り返し用いられるのに対し、リビングバイブルではそれらは省略されている。同じフレーズを繰り返し使用することは、日本語としてくどさを感じる原因の一つとなろう。

24, 25節

新共同訳

マルタは「終わりの日の復活のときに復活することは存じております」と言った。

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。

リビングバイブル

「はい、いつか全ての人が復活する日には、もちろん,,,,,,」

「このわたしが、死人を生き返らせ、もう一度命を与えてやるのだ。わたしを信じる者は、たとえほかの人と同じように死んでも、また生きる。

27節

新共同訳

マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世にこられるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

リビングバイブル

「はい、先生。あなた様こそ、長いあいだ待ち続けてきた神の子キリストだと、信じております。」

リビングバイブルのようにいちいち誰が言ったのか明示せず、その発言のみを記述しておくやり方は、小説にもみられる。二人の人間の間の会話であれば、聞き手と話し手のidentityは文脈からおのずとはっきりしてくる。日本語ではジェンダーによっても言葉使いが異なるので、男性と女性の会話であれば、なおさらいちいち発話主体を明示しなくても誰が言っているのかわかる場合が多い。つまり省略してもテキスト理解上差し支えない場合がほとんどである。発言部分のみを記述する方法は、場面の臨場感を出す上でいちいち「誰が、～と言った」という情報を入れたテキストよりも読み手には効果的かもしれない。少なくとも、「くどさ」が少ないように感じられるのではないだろうか。その

一方で、文脈に埋め込まれた情報が十分に読み手に伝わっていない場合には、省略から来る曖昧性は誤解の原因ともなりかねない。

もう一つ、特徴的な点として、リビングバイブルでは固有代名詞を使用し、ズバリ、誰のことを指しているのか直接的に述べる傾向がある。例えば、新共同訳で「あなたの兄弟」とされているところが、リビングバイブルでは「ラザロ」と固有名詞を用いて訳されている。これは、省略とは違う現象だが、情報をどこまではっきりとテキストに挿入するか、という点で、リビングバイブルの方がこの点では直接的な訳であると言えるのではないだろうか。

松本 (2001)、高橋 (1999) の研究では、英語の Today's English Version や新改訳に較べて、新共同訳は人称詞の使用が少なく、より自然な日本語に近づいた訳という見方もできるが、リビングバイブルと比較すると、新共同訳における人を表す表現は、省略が期待される箇所では、リビングバイブルよりも多く使用されていると言えよう。ただし、リビングバイブルでは、意味を強調するために、「あなた様が、あなた様さえ (21節)」のように繰り返し言い表しており、省略が多い少ないは一概にはいえないのである。

3. 5 文脈のつながりを示す表現

次に、テキストにおけるセンテンス間のつながりを明示するような表現、前後の脈略を示して談話としてのまとまりをつくるのに貢献する連結の言葉、「～さえ」などの取立て詞の使用を眺めていこう。ここでは、リビングバイブルの方がそういった表現の使用頻度が高いことがわかる。

文脈のつながりを示す表現 (the words which create cohesive ties in the text)

聖書翻訳における省略の取り扱い — 新共同訳とリビングバイブルの比較 —

節	新共同訳	リビングバイブル
6		けれども, なぜか
7	もう一度	ようやく~した
11	しかし	
14		今度は~した
20		ところが
		じっと~のままで
21		~さえ
25		また
		たとい~でも

テキストにおけるつながり, cohesionについてはHaliday & Hasan (1976)によって分析, 分類されているが, 連結辞, いわゆるconjunctionsは, センテンス同士をつなげる, linkersとしてcohesionを作り上げるうえで有効な方法であると指摘されている。リビングバイブルは前のセンテンスから次のセンテンスへとテキストとしてどうつながるのか, 新共同訳より言葉を補いながら, 読み手が新しい情報を理解するうえでの労力を低く抑える訳をしていると言えよう。

3. 6 状況や感情の補足説明をする表現・強調の表現

連結のことばだけでなく, 状況の補足説明や, 感情の動きを表す言葉, 情報の強調表現においても, はっきりとした違いが二つの訳にはみられた。

状況や感情を補足説明する言葉 (expressions which provide contextual/emotional information)

節	新共同訳	リビングバイブル
4		全く意外
5		心から
8		もうれつな反対

		なんてことを、先生！
		お忘れですか！
		のこのこと
		間違いざた
9	～ではないか	
10		危険きわまりない
12		ぐっすり
		ぐずぐずしないで
13	ただ	
17		もう手遅れでした
20		取るものも取りあえず
		じっと
21		あなた様が、あなた様さえ
25		この (わたしが)
26		～なんか絶対にならない

リビングバイブルの方が、状況説明を補うことばや意味を強める強調的な表現が多い。このヨハネ11章1～27節は、ラザロの死をめぐる、登場人物たちが感情的に大きく揺さぶられている場面である。この箇所の直前では、イエスがもう少しで石で打ち殺されそうになった記事も記載されている。身の危険を感じているイエスの弟子たち、そしてラザロの死と悲しみ。このような場面において、強調表現では感情のゆれをさらにドラマティックに表現する効果をもつものが多く使われている。

以上、新共同訳、リビングバイブルを使って、ヨハネによる福音書11章の一部を比較検討した結果、どちらの訳の方が省略をより多く使っているかは、一概には言えないことがわかった。人を表す表現に関しては、文脈上誰のことがわかっている場面でも、新共同訳の方が、リビングバイブルよりも多く用いている。一方、リビングバイブルでは協調する為にあえて人をさす言葉が繰り返されていることもあった。また、文脈における話しのつながりを示す言葉はリビングバイブルの方が多用している。状況や感情を表す言葉もリビングバイブルの方が多い。さらに「…」で示された、語尾の省略はリビングバイブルで

は用いられているが、新共同訳では使われていない。省略された「…」の部分に何を補うかは、読者にまかされている。全体として、主語や人を指し示す語の省略、不完全なセンテンスにおける語尾の省略といった、日本語において特徴的に用いられるタイプの省略が、リビングバイブルでは多く用いられていると言えよう。リビングバイブルに比べると、新共同訳は文脈のつながりを示す語や、感情・状況説明の語が少ないという傾向がある。

4. アンケート調査

さて、本研究では、テキストにおける省略や情報補足の違いが、聖書になじみのあまりない読者にどのように理解され評価されるかを知る為に、簡単なアンケート調査を行った。

4. 1 目的

文脈上の情報や談話のつながりを示す言葉の使用に差がある二つの聖書翻訳テキストを読んでもらい、理解度や好感度がどのように評価されるかを調べる。

4. 2 方法

2003年度前期英語学研究入門の授業内でアンケート用紙を配り記入をもらった。アンケート用紙は、A、B二つあり、Aは新共同訳、Bはリビングバイブルのヨハネによる福音書の同じ箇所（11章1～27節）を抜粋して載せた。まずA（新共同訳）を読んで質問に答え、次にB（リビングバイブル）を読んで質問に答えてもらった。A、B二つをペアーにして回収する為に、両方に名前と、クリスチャンであるか否か、またこの箇所を以前に読んだことがあるかないかを記入してもらった。

Aの質問用紙に書かれた質問：

「6節ではなぜイエスはなお二日間同じ場所に滞在したのだと思いますか」

「21節で、マルタは何を訴えたかったと思いますか」

Bの質問用紙に書かれた質問：

「6節で、なぜイエスは二日間なお同じ所に滞在したのだと思いますか。」

「21節の『...』にことばを補うとしたら、何がはいりますか。」

「21, 22節で、マルタはイエスに何を訴えたかったと思いますか。」

「24節の『...』には何が入るとおもいますか。」

「AとBどちらが理解しやすいですか」

「AとBどちらの聖書を読みたいですか」

4. 3 インフォーマント

アンケートに答えたのは、全員フェリス女学院大学の学生である。ほとんどが1年生である。英語学研究入門の「言わないことの言語学」の最後の授業においてアンケート用紙を配り、その場で記入をしてもらった。

アンケートに答えた学生の数：53名

クリスチャンの数：3名

この箇所を以前に読んだことのある者：4名（うち、クリスチャンは2名）

インフォーマントの背景：

(1) 大学の必修科目にキリスト教があり、学生たちの多くは、新共同訳聖書の方は、読んだ経験がある者が多い。文体として慣れているのは、新共同訳聖書の方である。ただし、一年生の前期なので、長いあいだ新共同訳聖書に読み親しんできたというわけではない。

(2) インフォーマントは、英語学研究入門の授業において、省略を含む、「言わないこと」に関する言語学的な考察について学んできている。情報の省略、間、沈黙がもつさまざまな機能について講義を受けており、「言わない」部分が持つコミュニケーション上の役割について、多少の認識をもっている。

4. 4 結果

4. 4. 1 理解しやすさに関して

どちらの翻訳の方が理解しやすいか？

新共同訳 1名

リビングバイブル 52名

リビングバイブルの方が理解しやすいとする理由としては、情報量の多さによるものと、文体に起因するものが挙げられた。おおまかな傾向としては、リビングバイブルの方が情報量が多く、状況や登場人物の人間関係、具体的な発話の内容などに関して、理解しやすい、という意見が大半を占めている。

(1) リビングバイブルの方がより多くの情報が補われている

新共同訳よりも詳しく書かれている、

省略が少ない

状況についての説明がしてある

主語が誰かわかりやすい

登場人物たちの人間関係がわかりやすい

(2) 「…」の部分があり、自分で解釈する余地が残されている

(3) 新共同訳では、「あなた」や「彼」が多く使われていて、誰が誰だかよくわからない。

(4) リビングバイブルは表現が直接的で、喩えが少ない。

新共同訳は内容が抽象的なところがある。リビングバイブルは、会話の内容が具体的。

(5) リビングバイブルの方が、センテンスが長い。

新共同訳は、センテンスが短く、切れていて、わかりづらい。

リビングバイブルの方がセンテンスが長くて、意味を理解しやすい。

さらに、情報の有無だけではなく、文体の問題が浮かび上がってくる。リビングバイブルの文体は、より臨場感があり、ドラマティックな効果がある、堅苦しくない。それゆえリビングバイブルの方が読んでいて理解しやすく、すっと頭に入ってきやすいなどの指摘があった。

(6) リビングバイブルの方が現代語に近い文体である

(7) リビングバイブルの方がやさしい言葉を使っている。

新共同訳は普段自分が使わないような言葉を使っている。

(8) 新共同訳は日本語として古めかしい感じがする。

(9) リビングバイブルの方が、臨場感がある。

！ や …… をリビングバイブルの方は使っていて、登場人物の感情を理解しやすい

会話の台詞が口語的

ドラマティックに聞こえる。

4. 4. 2 どちらの訳を読みたいか？

さて、二つの翻訳を比較した際に、リビングバイブルの方が理解しやすいと考えるインフォーマントがほとんどであったが、どちらの聖書を読みたいかという質問に対しては、必ずしもリビングバイブルではない、という意見もみられた。

どちらの聖書を読みたいか？

新共同訳 8名 (そのうち、クリスチャンは1名)

リビングバイブル 43名

両方を読み比べたい 2名 (そのうち、クリスチャンは1名)

新共同訳の方が、リビングバイブルよりも読みたいと思う理由

8名のインフォーマントが、新共同訳聖書の方を読みたい、と答えている。もちろん、理解しやすいリビングバイブルを読みたいと答えた学生は43名おり、多数を占めるが、理解しやすいことイコール読みたいとは単純にはいかないことがわかる。

では、新共同訳聖書を読みたいとする理由について、調査結果をまとめると、以下のようなになる。ここでも、情報が提示されているか、解釈を補えるかどうか、という点に関するものと、文体に関するものが挙げられた。

- (1) 新共同訳の方が、自分なりの解釈をする余地がより多くある。
新共同訳の方が、じっくり考えながら読むと思う。
難しい箇所について、新共同訳の方が、深く考えながら読める。
リビングバイブルは、さっと読み流してしまいそう。
- (2) 文体が、新共同訳の方が好き
会話体は、聖書として何か変な感じがする。
イエスの言葉に権威が感じられず、イエスの話し方が嫌い。
新共同訳の方が、聖書を読んでいる気がする。これぞ聖書、という感じがする。
新共同訳の方が、読みなれた文体である(クリスチャンによる回答)。

以上のように、リビングバイブルの方が文脈理解を助ける情報が豊富であるが、一方でその文体、とりわけイエスの発話スタイルに不快感を持つ読者がいる。これは、日本人にとって聖書がもつイメージ、イエス・キリストが持つイメージとも関連しているのではないだろうか。ここで注意しておきたいのは、アンケート調査に関わった53名のうちクリスチャンは3名だけであるということ、そして若い10代後半から20歳ぐらいまでの学生たちである、という点である。キリスト教主義の大学に入学してきたという点では、本人がクリスチャンではなくても、出身高校や身内がキリスト教と関連していた人がいた可能性があるかもしれない。しかし、インフォーマント自身は、ほとんどがクリスチャンではないことを考えると、非常に面白い結果である。

このような文のスタイルは全体の印象、さらには書かれた意図にたいする解釈にも影響を及ぼす。

結論

本研究では、新共同訳聖書とリビングバイブルと言う、異なる編集理念をもった聖書翻訳を比較し、情報の省略と補いを中心に、二つの訳の特徴を分析した。さらに、一般読者によるアンケート調査も取り入れて、訳の違いがもたらす効果を考えた。

リビングバイブルの方が、状況を説明する情報や文脈のつながりを示す表現が多い一方で、日本語として省略が自然な箇所では、思い切った省略の使用を行っていた。新共同訳では、一部くどさの残るところがあり、また情報が巻末注に移されていたり、本文中には挿入されていない部分があった。結果として、日本人にとっては新共同訳よりもリビングバイブルの方が内容を理解しやすい翻訳になっていることがわかった。しかし、それがすぐに、人々が読みたいと思う訳かといえ、そうとも簡単にはいえないことも明らかになった。文体は、内容理解のみならず、全体の印象に影響をもつ。聖書の権威にふさわしいと人々が考える文体であるかどうか（特に聖書の中心となるイエス・キリストの発言）、省略とは別の考慮が必要とされてくる。

関連性は相対的な概念である (Sperber & Wilson 1986)。コンテキストによって関連性は変わってくる。Guttの主張は認めるものの、読み手によって聖書に対して持っている認識や期待が異なる以上、どんな翻訳もすべての人に最適にはなりえない。省略を好むといわれる日本人でさえ、省略をめぐる contextual effectsはさまざまである。その意味で、翻訳する言語の民族が聖書翻訳に対して求めている期待をまず調査することからはじめようと言うGuttの指摘は適切である。が、それでもなお、それとは異なる期待を持つ人々も必ず存在することをわきまなくてはならないだろう。

「聖典」として聖書を読むのか、「小説」として読むのか、といった読者側の目的の違いによっても、求められる聖書の訳は異なってくる。しかし、その上であえて、今後「聖典」としての聖書翻訳にも提言をするとすれば、リビングバイブルに寄せられた圧倒的な「理解しやすさ」、「読みやすさ」の声にも目をとめるべきではないか、ということである。難解な用語の置き換え、場面によっては思い切った省略の使用など、日本語としての自然さ、理解のしやすさについて検討の余地がまだあろう。

聖書翻訳における省略の取り扱い —新共同訳とリビングバイブルの比較—

参考文献一覧

新共同訳聖書 1987, 1988 日本聖書協会

リビングバイブル 1978 いのちのことば社

松本曜 2001. 新改訳聖書と新共同訳聖書における二人称の扱い—日本語としての適切性の検討. 東京基督教大学紀要キリストと世界第11号, 73-100ページ

松本曜 2004. 新改訳聖書と新共同訳聖書における文末語形と照応表現: 日本語としての適切性の検討Ⅱ. 東京基督教大学紀要キリストと世界第14号, 133-161ページ

高橋道子 1999. 日本語における主語の省略の一考察: 聖書「詩篇」の翻訳で見た日英語の比較」日本言語学会第119会大会発表論文

Gross, Carl D. 1996. Translation by omission. *The Bible translator*. Vol. 47, No. 2. pp. 211-217.

Gutt, Ernst-August. 2000. *Translation and relevance: cognition and context*. St. Jerome Publishing.

Hinds, John. 1982. *Ellipsis in Japanese*. Carbondale, IL. And Edmonton, AL.: Linguistic Research Inc.

Nida, Eugene A. 1964. *Toward a science of translating: with special reference to principles and procedures involved in Bible translating*. Leiden: Brill.

Nida, Eugene A. and Charles Taber. 1969. *The theory and practice of translation*. Leiden: Brill.

付録

	A (新共同訳)	B (リビングバイブル)
1	ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。	マリヤのことを覚えていますか。イエスの足に高価な香油を注ぎ、それを髪でぬぐったあの婦人です。さて、そのマリヤの兄弟ラザロが病気になりました。彼と、マリヤ、その姉のマルタは一緒にベタニヤに住んでいました。
2	このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。	
3	姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。	マルタとマリヤはイエスのもとに使いをよこしました。「先生、あなた様が目をかけて下さったラザロが重い病気にかかり、明日をも知れない状態です。」
4	イエスはそれを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」	この知らせを聞いたイエスは、全く意外なことを言われました。「この病気は、ラザロが死んでそれっきり、ということにはならないのだよ。神様の栄光が現されるためだからね。神の子の私が栄光をうけるのだ。」

フェリス女学院大学文学部紀要第40号 (2005)

5	イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。	イエスは、マルタたち3人を心から愛しておられました。
6	ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じところに滞在された。	けれども、なぜか、なお二日間そこにおいて、なかなか腰を上げようとはなさいません。
7	それから、弟子たちに言われた。「もう一度、ユダヤに行こう。」	二日たって、ようやく、「さあ、ユダヤに行こうか」と弟子たちに言いました。
8	弟子たちは言った。「ラビ、ユダヤ人たちがついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへいかれるのですか。」	ところが、もうれつな反対が返ってきたのです。「なんてことを、先生！つい先日、ユダヤ人の指導者たちが、先生を殺そうとしたのをお忘れですか！なのに、またのこのこと出かけていくなんて気違いさたです。
9	イエスはお答えになった。「昼間は十二時間あるではないか。昼のうちに歩けば、つまづくことはない。この世の光を見ているからだ。」	「昼は十二時間ある。その間に歩けば、安全でつまづくこともないだろう。」
10	しかし、夜歩けば、つまづく。その人の内に光がないからである。」	ところが、夜歩いたら危険きわまりない。暗くて、足を踏みはずすかもしれないからね。」イエスはこう答えてから、
11	こうお話しになり、また、その後で言われた。「わたしたちの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」	さらに続けました。「友達のラザロが眠っている。彼を起こしに行かなくちゃね。」
12	弟子たちは、「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」と言った。	これを、ラザロが夜ぐっすり眠れたものと勘違いした弟子たちは、「じゃあ、病状はよくなってるんですね」と聞き返しました。しかしイエスは、ラザロは死んだと言われたのです。
13	イエスはラザロの死について話されたのだが、弟子たちは、ただ眠りについて話されたものと思ったのである。	
14	そこでイエスは、はっきりと言われた。「ラザロは死んだのだ。」	そこで、今度は、はっきりと言って聞かせました。「ラザロは死んだのだ。」
15	私がおの場に居合わせなかったのは、あなた方にとって良かった。あなた方が信じるようになる為である。さあ、彼のところへ行こう。」	私がおの場に居合わせなくてよかった。これでまた、あなた方が私を信じる機会が増えるのだからね。さあ、ぐずぐずしないで、彼のところへ出かけよう。
16	すると、デイディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、「わたしたちも行って、一緒に死のうではないか」と言った。	ここで、「ふたご」とあだ名されているトマスが、「おい、みんなで行ってさ、先生とご一緒に死のうじゃないか」と、仲間の弟子たちに誘いかけました。
17	さて、イエスが行ってご覧になると、ラザロは墓に葬られてすでに四日もたっていた。	一行がベタニヤについてみると、もう手遅れでした。ラザロはすでに墓に葬られ、四日にもなるというのです。
18	ベタニヤはエルサレムに近く、15スタディオンのところにあつた。	ベタニヤは、エルサレムからわずか3キロほどの所でしたので、
19	マルタとアリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに來ていた。	ユダヤ人たちが大ぜい、お悔やみに詰めかけていました。マルタとマリヤが慰めのことばを受けているところへ、

聖書翻訳における省略の取り扱い —新共同訳とリビングバイブルの比較—

20	マルタは、イエスがこられたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。	イエスのおいでが知らされました。マルタはそれを聞くと、取るものも取りあえず、迎えに駆けつけました。ところが、マリヤは家の中にじっと座ったままでした。
21	マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」	マルタはイエスに訴えました。「先生！あなた様が、あなた様さえいて下さったら、ラザロは死なずにすみましたものを,,,,,,。」
22	しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえて下さると、わたしは今でも承知しています。」	でも、まだ遅くはありません。あなた様が神様にお願いして下されば、生き返らせていただけますもの,,,,,,。」
23	イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、	イエスは言われました。「その通り。ラザロは生き返るのだよ。」
24	マルタは「終わりの日の復活のときに復活することは存じております」と言った。	「はい、いつか全ての人が復活する日には、もちろん,,,,,,。」
25	イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」	「このわたしが、死人を生き返らせ、もう一度命を与えてやるのだ。わたしを信じる者は、たといほかの人と同じように死んでも、また生きる。」
26	生きていて私を信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」	わたしを信じて永遠の命を持っているからね。滅びることなんか絶対にないんだ。このことが信じられるかね、マルタ。」
27	マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世にこられるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」	「はい、先生。あなた様こそ、長いあいだ待ち続けてきた神の子キリストだと、信じております。」

i 本研究は、2003年度フェリス女学院大学共同研究「欧米文化の背景とキリスト教」において発表した内容に、当日いただいたコメントを参考にしながら、大幅に加筆・修正したものである。また、もともとはSummer Institute of Linguistics(ウィクリフ聖書翻訳者協会に所属する言語学者たちの研究と教育機関)のPaul Lewisと現在進めている共同研究の一部を中間報告としてまとめたものである。Ellipsisと聖書翻訳について関連性理論との関わりの中から分析をすすめており、日本語における状況調査を饒平名が、英語における調査をLewisが担当している。

尚、フェリス女学院大学での共同研究会にて、川西進先生、宮坂覚先生、井出新先生、および参加者の学生の皆さんに貴重なご意見をいただいた。ここに記して、感謝したい。

ii 実際に、フェリス女学院大学で行なった学生アンケート調査でも、イエスの発言に権威が感じられない、好ましくない、という意見がでていた。